

開拓の歴史は北海道の宝

元北海道開拓記念館 学芸部長 関 秀志

1 北海道開拓史研究の動機

筆者は高校生時代から歴史科目が好きで、将来、高校の日本史の教師になろうと考え、昭和30年（1955）に大学に入学しました。大学では文学部史学科で国史（日本史）を専攻しましたが、近代史の永井秀夫先生の講義とゼミが筆者のその後の北海道史研究の方向を決める結果になりました。先生のゼミでは、明治初期に開拓使の顧問として、開拓政策について重要な指導・助言を行った元アメリカ合衆国農務局長ホーレス・ケプロンの報告書を読み、北海道史を日本史・世界史の広い視野でとらえることの大切さを学びました。卒業論文のテーマは「明治政府の士族対策と北海道への士族移住」で、この論文作成をとおして、歴史研究の厳しさと楽しさを経験し、卒業後も北海道地域史研究を続けることにしました。

2 高校生の郷土史研究

昭和34年に母校（北海道羽幌高等学校）の教員になり、早速、郷土史研究部を創設し、部員の生徒たちとともに、地方史（苫前郡・通学区域）の調査を続けました。北海道史概説の学習、役場などに残されていた古い記録の調査、家族や近所の古老からの聞き取り調査、夏休みを利用した遺跡発掘調査への参加や札幌の道立図書館・研究機関での史料調査などです。生徒たちは、受け身の日本史の授業とは違った、積極的な歴史調査に興味を持ち、後には、部員の代表が北海道高等学校郷土研究発表大会で研究成果を発表しました。また、1年間でしたが、日本史の授業とは別に、毎週1時間、地方史（苫前郡史）の特別授業も試みました。

さらに、羽幌高校勤務時代には、8年間、地元の『羽幌町史』の執筆、編さん事業にも携わり、地域史の視点から、北海道史の様々な側面をとらえることができ、その後の北海道史研究に役立ちました。

3 北海道史の親しみ方—身近な歴史から

昭和44年、北海道開拓記念館（現北海道博物館）の開設準備のために、道庁に転勤となり、平成9年の定年退職まで、北海道史の資料の調査収集、展示、保存、教育普及、研究等に従事し、北海道開拓の村（野外歴史博物館）の開設にもかかわりました。また、現在に至るまで多くの自治体史（市町村史）の執筆、編集を経験しました。

このような調査研究の経験をもとに、一般道民の方々にお勧めしたい北海道史（開拓史をふくめ）の親しみ方について、2、3述べてみたいと思います。

歴史への興味を深めるには、歴史書を読むこと（読書）と、さらに一歩進め、関心を持った事象について自分で調査し、その結果をまとめること（研究）があります。言うまでもなく、読書だけでも楽しいですが、調査研究まで進めると、楽しさは一層深まり、視野が広がります。

調査研究というと、難しすぎると思われがちですが、そうでもありません。そこで、個人、一族、集落などの身近な事象を取り上げてみては如何でしょうか。一見、小さなことが、その時代の北海道や日本、テーマによっては世界の動きと深くかかわっていることに気づくことが少なくありません。

例えば、先祖が北海道に移住した動機を調べてみる

*国土交通省北海道開発局が中心となって進めている「ほっかいどう学」については、以下に情報が掲載されています。
<https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ki/keikaku/splaat000000ozs0.html>

と、明治維新によって多くの士族が失業していたこと、府県の農村社会が大きく変化し、農民の貧困化が進んでいたこと、太平洋戦争末期に米軍による都市の大空襲があったことなどに気づいたりします。また、先祖の移住経路の調査から、当時の国内の具体的な交通事情が分かります。府県から北海道に移住してきた開拓者たちが、一般の農家でもプラウ（馬に引かせて用いる犁）、ハロー（田畑の土を掘り返したのち、碎土・地ならしを行う碎土機。）などの洋式農具を使用していることに驚きますが、その理由を調べてみると、明治初期に開拓使が洋式農法の導入を図ったことに起因することに気づきます。さらに、郷土史研究部の高校生が、父からアジア・太平洋戦争中の炭鉱での経験を聞いて、当時、労働者が不足したため、朝鮮半島から多数の労働者を連行したことを知ったことがありました。

開拓期の集落の交通事情を調べますと、道路が未整備で、住民が自主的に総出で道の脇の草刈りをしたり、馬車を出して砂利敷き作業を続けたりしていました。住民の地域社会づくりへの意欲を感じます。

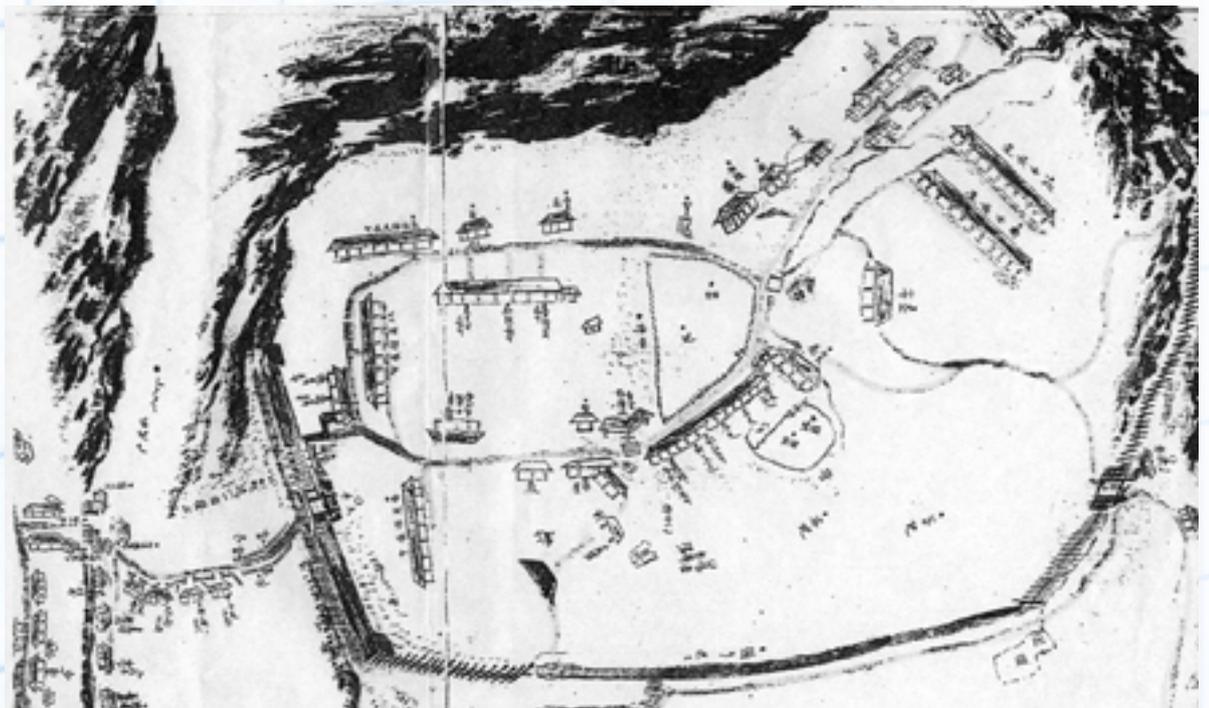
4 地域づくりへの提言

近年、北海道では歴史的特性、特に地域の文化財、

文化・産業遺産を生かした地域づくりが熱心に試みられていて、最近では空知の炭鉱・室蘭の鉄鋼・小樽の港湾とそれらを結ぶ鉄道の歴史や産業遺産をテーマとした「炭鉄港」が文化庁の「文化遺産」に認定され、話題となっています。

ここで、移民・開拓史の分野に関する提案を一つだけしたいと思います。幕末期に幕府の蝦夷地警備・開拓政策の一環として行われた東北諸藩による蝦夷地経営の拠点となった陣屋跡地の整備・活用と所在市町村及び関係する県の市町村の交流・ネットワーク事業へのとりくみです。北海道の移住・開拓史というと、明治以降が目されがちですが、幕末期の諸藩の開拓は近代の本格的な開拓の先駆をなし、開拓使の政策にも引き継がれた部分が少なくありません。

陣屋の跡地は、南部藩のモロラン・ヲシヤマンベ・砂原陣屋跡（昭和9年指定、室蘭市・長万部町・森町）、松前藩戸切地陣屋跡（昭和40、北斗市）、白老仙台藩陣屋跡（昭和41、白老町）、庄内藩ハママシケ陣屋跡（昭和63、石狩市）などが、既に国の史跡に指定されていますが、これらの跡地の整備と活用は不十分です。関係自治体が連携し、北海道や国の援助を得て事業が進められることを期待します。



西蝦夷地庄内領ハママシケ陣屋の図
(部分)
(浜益村教育委員会
『史跡庄内藩ハママシケ陣屋跡—平成元・2・3年度保存管理計画策定事業報告書』
平成4年) 所収